

読売歌壇

小池 光選

柚子十個湯船に浮かべもの想ふ寂しいのねと三
個寄る

角田市 豊岡 浩一

【評】十個つかべた今日の柚子湯。そのうち
三個が寄ってきた。まるでわがこころを見通
すように。十個ぜんぶが寄ってこないところ
にリアリティがある。数字の使い方が上手。
岩手広島久留米より友の来て歌会始まる生きて
ゆくべし

市川市 安田 恭子

【評】短歌結社の歌会だろう。全国から愛好
家が集まってくる。短歌だけでつながる人間
関係はいい。励まされ、生きてゆく力をもら
える。作者は八十七歳の方。

ヘーゲルの本をひらいた図書館で閉じて戻した
ヘーゲルの本

雲南市 熱田 一俊

【評】すぐに書棚に戻したにせよ、大哲学者
ヘーゲルに触れんとした熱意と好奇心、すば
らしい。初句と結句が同じなのもおもしろい。
団栗が落ちて散らばる坂下るこの一年に何を為
せしか

岐阜市 後藤 進

話したきことのあり気な山茶花の蕾が二つ初春
の朝

川西市 越智 照雄

ずっと前テレビでその人は言っていた「死にた
くなったら歩きなさい」と八王子市 山本百合子
新年の東京タワーと肩組んで酔っぱらいわれ街
を闊歩す

垂水市 岩元 秀人

八十の手習ひなれば気恥かしハイデガー入門こ
つそり開く

四街道市 須崎 輝男

猫たちの墓は小暗し白椿抱くが如く静まりて立
つ

鹿嶋市 加津牟根夫

名を呼べば「親分何か用ですか」と走り来る猫
家族なりけり

新潟市 古泉 浩子

栗木 京子選

朝ぐとに会おう園児にヤッホーと呼びかけられ
て今日も始まる

大和市 黒米美枝子

【評】「おはようございます」の挨拶もうれ
しいが、「ヤッホー」には登山の途中のよう
な臨場感があつて心が弾む。作者と園児たち
の和やかな空間に私も仲間入りしたくなる。
なかぞらというより果てというような深さにカ
イトを泳がせて児は

徳島県 永田 愛

【評】晴れ渡った冬空。カイトを眺めている
と、中空に浮かぶというより、さらに深いと
ころへ吸い込まれてゆくような気がしたので
あろう。「果て」を捉えた感覚が鋭い。
をりをりに雑事記し力レンダー一年間の重み
を外す

上尾市 光台三智子

【評】特別な予定だけでなく雑事も記した力
レンダー。小さな積み重ねが一年間を物語つ
ている。「重み」に確かな実感がある。
一人用おせちに飾る鶴を折るとも寿ぐ父母は
なくとも

東京都 檀上 りく

風に乗る雪は微かな音たてて涙に変わる窓の方
ラスに

筑後市 山城 明子

木蓮の黄葉みな落ちて裸木は赤城おろしに小枝
の凍ゆ

熊谷市 有田 義正

「爺ちゃんの老後を見る」と言つてた子がこの
正月に彼連れてくる

松阪市 山本 公策

点滴の一つ一つにリズムあり生きろ生きろと我
を励まし

大阪市 吉村 敏明

肩に乗る空気さほどに重いか信号待ちにしゃ
がむ青年

三田市 藤原栄美子

東北の山寺たずね香を焚き言葉交せば台湾の人

八王子市 松田 敦子

俵 万智選

簡単に傷つくけれど簡単に壊れずプラスチック
に生きる

横浜市 友常 甘酢

【評】軽やかに、したたかに。リズムカルな
上の句が、プラスチックの比喩と見事にマッ
チした。「のよつに」とせず「プラスチック
に」としてしまふセンスも、いい。
この町を誰にも知らせていないのに郵便受を覗
いてしまふ

大和郡山市 本田 岳

【評】手紙など来るはずがないのに、つい確
認してしまふ。引っ越したばかりの、ちよっ
とした心細さ、人恋しさが、よく出ている。
吾子たちを左右につなぎ両の手は自由気ままな
糧となりぬ

横浜市 中村 杏

【評】予測不可能な動きで振り回してくる子
どもたち。糧の比喩が、未来へ漕ぎだすよう
なイメージを、もたらしてくれる。
何ひとつ忘れ物せず帰国せりホームステイの留
学生は

東京都 伊藤 直司

最速で一直線にわが胸を射してくるのであなた
は光

上尾市 関根 裕治

チェンチェンとチェーンの音を響かせてバスが
知らせる朝の降雪

仙台市 小野寺健二

崖下に落ちてほしいと思ひ詰めた恋を月日がタ
ンポボにする

南あわじ市 山田 咲月

動かししたホースから水が出るように秘めた想い
の不意打ちをする

高島市 宮園佳代美

フリー素材みたいな並ぶ食卓のケーキとピザと
ケンタッキーと

横浜市 紺屋 小町

ハニーフラッシュミみたいなノリで乗り越えろ
真冬の汗はホットフラッシュ

足利市 坂庭 悦子

黒瀬 珂瀾選

空き車庫に吹きだまりたる落葉など掃きつし
のぶ愛車との日々

海老名市 玉川 伴雄

【評】免許を返納し、車を処分したのでしょ
うか。たまった落葉が、空っぽの車庫の様子
をさらに印象づけます。運転から離れたとい
う喪失感を巧みに表現した一首です。
雪山をばふふと踏みかきじきの交代すれば腿
のつり初む

新発田市 加藤じやすみん

【評】雪中歩行用の民具「かんじき」。おそ
らく体験会があつたのでしょう。一通り歩い
てみてその大変さに腿がつりそうになった。
昔の人はすごかったんですね。

再建せし店の写真と思ひ添え能登の友より賀状
が届く

南丹市 中川 文和

【評】能登震災より一年。被災地の友の賀状
には、地震に負けずに生活を取り戻そうとす
る姿があつた。人の生きる力を感じます。
十八で逝つたあの子が子犬の頃つけた足跡今も
残れり

オランダ 宮沢 洋子

夫婦して「真赤な太陽」うたひしよ西方浄土の
妻を今おもふ

小美玉市 松山 光

描くこと止められそうもないからに画材一式極
に納む

仙台市 田口 隆広

総代の初仕事なり座敷にて紋付袴の親父を見た
り

福島市 富山 貞治

凍て雲の間より射せる一筋の冬の光を独房に恋
ふ

松本市 武井 絳彩

だんだんと早口になる十本の指を駆使して打つ
顫未書

高島市 くらたか湖春

不自然なあかるさの語尾に去るひとの斜線をひ
いたような夕影

札幌市 鈴木 精良